チリ・パタゴニア1968-69 ──ある学生探検の記録　第11回

氷のフィヨルドでのゴムボート転覆

安成哲三　やすなり　てつぞう
名古屋大学地球水循環研究センター（気象学・気候学，地球環境学）

イラスト＝安成　晶

この連載は，現在の私ではなく，35年前に学生だった私の書いた記録である．当時，京都大学探検部に所属する学生であった私は，仲間の2人と南米チリ・パタゴニアの探検を思い立ち，そして2年近くを費やして1968年にようやく実現した．帰国後，私はその探検の報告を約半年かけて書き上げた．内容は，探検の思い立ちから帰国まで，私たちは何をやり，何を見聞きし，そして何を考えたかを，あくまで私自身を通して記したものであるが，いくつかの不運が重なり，結局，そのまま35年間，眠り続けることになってしまった．今回，1960年代末の学生による「探検」の記録として，ほとんどそのまま『科学』に，十数回に分割して掲載していただくことになった．

前回（第10回，1月号）は，氷河地域の滞在も終わりに近くなり，珍しく無風快晴となった短い数日，付近の山登りを楽しみ，湖畔キャンプでの神秘的な夜景を体験したことなどを報告した．今回は，本来調査するはずであった巨大なピオ11世氷河への偵察や，氷河地帯からの撤収作業時に起こった，氷山が浮かぶフィヨルドでのゴムボート転覆事故などについて報告する．

登山と調査と

2月2日．今日も快晴だ．全員で昨日の下降点より少し上流の地点にまでボッカし，まず伊藤隆，井上民二（あだ名「ブンヤ」）のベテランが下る．激流の下流からには違いないが，急カーブした早瀬がある．1,2回くるくると回っていたが，無事通過し，視界から消えた．残る3人はキャンプに戻り，2回目のボッカ．まったく暑い．今は夏なのか．

途中，寺本巌副隊長，例の「白馬」ピークを見てはため息をもらす．高さは2000 m前後だろう．昨日晴れてからというもの，多くの隊員はこの山を見て盛んに登りたい，登りたいと言っている．ぼくたちはみな山好きばかりだ．今度の探検隊の目的は学術調査であることは確かだが，当初の計画では，氷陸にも上がり，手頃な山も登る余裕を持たせていた．が，大幅な計画変更，予定の遅れから，いずれもダメになってしまった．

いや，待てよ．氷陸はとうてい無理としても，「白馬」に登る余裕はもうないか．神父のモーターボートが迎えに来るのは5日の予定だ．撤収は今日も含めてあと3日ある．ゴムボート輸送のおかげでかなりスムーズに行っている．明日1日ぐらい山に登れる時間はあるのではないか．天気もこの分ならもう1日はもつだろう．なぜ寺本氏は，リーダーとして，行こうと言わないのか．

その理由はすぐ気がついた．確かに行こうと思えば行ける．しかし，行けるのは3人，2人は撤収に残らねばならない．ところが，「白馬」に登

りたがっているのは，伊藤を除く4人だ．1人にはあきらめてもらわねばならない．彼から誰かに「君はやめてもらおう」とは言えない．ぼくは考えた．このまま登らずじまいでこの地を引き揚げるならいつまでも隊の中に悔やみが残るに違いない．ぼく自身は，確かに登りたい．が，まがりなりにも先日900 m峰まで登った．また，プエルトエデンに帰れば，すぐウエリントン諸島にボート探検に行けることになっている．それにひきかえ，とても山好きのブンヤは，エデンに着いてからまだ山らしい山に登る機会を得ていない．これはぼくが降りよう．隊としてもあの「白馬」に登っておくことは，何らかのプラスになるかもしれないではないか．

ボッカのひと休みの時，ぼくは口を切って，その旨を言った．話はすぐ決まった．明日，寺本と両井上(ブンヤと井上治郎(あだ名「ジロー」))で「白馬」をアタックすることになった．ピッケルやザイルはすでに下におろしていたが，またかついで上げる．この決定の時いなかったブンヤは，それと察したのか思わずニヤッと笑った．

夜，登山と調査についていろいろ議論した．伊藤は，この探検隊の目的は学術調査であるのに，隊員の中には，「リソ・パトロン」「白馬」「三本槍」とか，山を見て「ええなあ」とか「登ろう」とか言っている者が多い．それが気にくわないと言う．彼自身，決して登山嫌いではない．ただ学術調査と決めたにもかかわらず，そんなことを言うのは不まじめだという．彼の気まじめなところがうかがえた．寺本副隊長は，「当然われわれの目的は学術調査であり，また登山よりもよほど価値のあることだ．ただ一応調査を一段落した時点において時間があって登山をするのはかまわないだろう」という．ぼくたちの隊はしょっ中さまざまなことで口論したり，けんかしたりしていた．が，お互いに話し合ううちに，なんとなく片づいてしまい，そのために隊としての機能に支障をきたすということはまったくなかった．むしろ，議論し，言いあうたびに，何かを得つつあったようだ．

今日も，昨夜と同じ，静かで美しい月光の夜だ．「白馬」へ行く3人は先にテントに入り，伊藤と2人だけで，お茶を飲んだり，写真を撮ったりする．伊藤は星の写真を撮っている．中島暢太郎隊長にこの神秘な光景を見せてあげたい．

図1——「白馬」ピーク(1600 m)に立つ寺本厳，井上治郎(ジロー)，井上民二(ブンヤ)の3隊員．ブンヤ隊員が掲げるのは，探検部のシンボルである「魚骨」旗．

翌日，3人は朝早く「白馬」に出発した．ぼくたち2人はゴムボートで下におり，海岸キャンプにつく．途中，川下りの様子を首にかけたニコン・ニコノスで撮りまくる．写真に気をとられ，小さな滝にのり上げてしまい，1回転する．

午後10時半．湖岸キャンプとトランシーバー交信．彼らのはずんだ声．8時間で頂上に着いたという(図1)．が，高度計は1600 m余しか示さなかったとのこと．「白馬」は，エクスマウス・フィヨルドとの分水嶺にあり，エクスマウスの入口付近まで流れ出したピオ11世氷河の端が見えたという．ということは，20万分の1の地図の位置より十数kmも海へ出ていることになる．氷陸のクレバス地帯を行く六甲隊らしきものも見えたという．またか．

寺本氏は，日本を出る前，AACK(京大学士山岳会)の仲間から，山に登ってこなかったら，AACK除名だと，冗談半分に言われたという．これで彼も除名されずに済んだわけだ．

氷河地帯をあとに

2月4日．ふたたびいつもの暗い空にかわった．今日はぼく1人で湖岸キャンプまでゴムボートを担いで行く．森林も湿原もモレーンも氷河もエカウク湖も見おさめだ．雨も降ってきた．4人でボート出発点まで装備を運び，残った最後の荷物

を取りに，1人で湖岸キャンプにもどる．誰もいなくなった湖．そのまま残した小屋の布シートが，風にパタパタと音をたてる．たき火がくすぶっている砂浜には物がちらばっている．突然，湖岸の浮氷がバチャと音をたてて引っくり返る．ハッと驚く．映画『渚にて』のラストシーンを思いだす．人っ子1人いない町の通り．「今からでも遅くはない．……」と書いた横断幕が風に揺れ，紙クズが舞う．……．気味悪くなってきた．まったく用をなさなかったフィックス・バー*がころがっている．それにマジック・インクで“We stayed here 3 Jan.-4 Feb. 1969. ……”等と落書きをする．こんなところに次に人間が来るのは，いったいいつ頃先のことだろうか．また次にやってくるのは，いったいどんな人間だろうか．チリ人か，アルゼンチン人か，アメリカ人か．それとも日本人だろうか．妙に気になる．本当なら，またぼくたちが，あるいは仲間が，第2次調査として来年でも再来年にでも来るのが一番いいだろう．が，今は何か人ごとのようにしか思えない．もう永久に誰も来ないのかも知れない．HPS10氷河を一べつして先を急ぐ．

ゴムボートに荷を満載して，ブンヤと2人で漕ぎ出す．最後の川下りだ．途中から雨が激しくなってきた．しぶきと強い風雨．先が見えない．雷鳴がとどろき，夜のように暗くなる．ほうほうのていで合流点に着く．寒い．ガタガタふるえながら寺本とジローを待つ．雨，雨，雨．雨に始まり雨に終る1カ月であったが，エデンの暖かいストーブに当たれるのももうすぐだ．そう思うと元気がでる．夜半すぎ，雨もようやく止み，星も見えだす．寒冷前線通過だった．

5日．神父はなかなかやってこない．海の状態が悪くて来ないのではないか．心配になる．もう食糧もほとんどない．プエルトエデンでエンジン付きのボートは，今のところ神父の「サン・ハビエル」号しかない．もし，それが故障でもしていれば，ぼくたちはお手上げだ．唯一の陸路は氷陸を越えてアルゼンチン側のパンパに出ることだ．が，六甲隊のようにそれ自体で大冒険だ．とくにエカウク湖から氷陸への可能な登路はちょっと見あたらない．まがりなりにも南米大陸に乗っかっているとは言え，実質は前は海，後は氷河でふさがれた陸の孤島だ．

午後7時．「サン・ハビエル」号はやっと来た．やはり水道地帯の状態は良くないようだ．荷物は最小限にして，後日もう一度撤収に来ることになった．もともとせっかちな神父だが，今日はとくに急がせる．

ボートはエンジンのうなりをたてて走り出す．ボート内で1カ月ぶりに日本からの手紙が配られる．それには，驚くべきニュースが次々と出てきた．京大にも大学紛争が起り，今大騒ぎだということ．東大の入試が中止になったこと．ぼくたちが乗ってきた大型鉄鉱石運搬船と同種の「ぼりばあ」丸の沈没．冬山の剣岳大量遭難．それには京大山岳部も巻きこまれたという，等々．が，すべて久しぶりの刺激剤的意味しか持たない．ぼくたちは，今別の世界にいるんだ．中島暢太郎隊長からの手紙はプンタ・アレナスからだ．2月の10日頃，サンチャゴを後にするという．「あれ，先生まだチリにいたんか」と誰か．隊長と別れたのは，ずっと昔のことのように思えた．

夜になってもプエルト・エデンまでなかなか行きつかない．遂に，ウェリントン島の小入江で夜を明かすことになる．暖かいストーブはまた遠のいた．翌朝早く，やっとエデンのわが家に帰還した．

大前進したピオ11世氷河

帰ってみると，エデンの空軍観測所には2人しか勤務していない．1人は通信士のゲレロ氏，もう1人は新しく来たムニョスというチョビひげのオッサンだ．ここでの仕事は何ですかときくと，パトロン・デ・エンバルカシオンだと言う．直訳すると「船の主」となる．偉そうな名だが，要するに船頭さんだ．が，今観測所にはエンジン付ボートはない．あるのはオールで漕ぐやつだけだ．「いつエンジンは来るの」ときくと，「さあ知らないね．5月か6月か，あるいはもっと先か」当分は彼も開店休業だ．

* 積雪の急斜面にロープを固定する時に用いるアルミ製の長いL字型ポール．

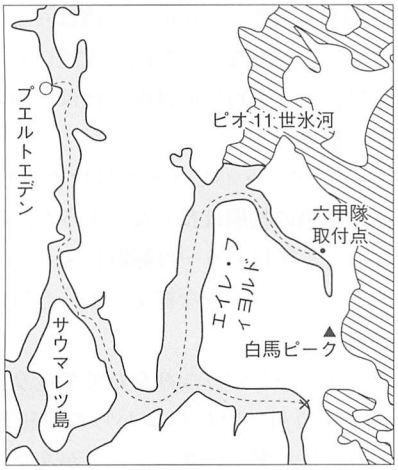

図2——ピオ11世氷河のあるエイレ・フィヨルド，六甲隊が取り付いたエクスマウス・フィヨルド，HPS10氷河に取り付いたファルコン・フィヨルド付近の地図． モーターボートでの航路を点線で，ゴムボート転覆地点を×で示す．

もう1人，なんとなく貧相な若者が居候している．彼はプエルト・モントからプンタ・アレナスに行くべく「ナバリノ」号に乗り込んだが，ただ乗りがばれて，ここで降ろされた．次の北行きの船が来るまで，観測所が引き取られているのだ．その彼は風邪をこじらせ寝たきりで，ムニョス氏等が看病していた．観測所もえらい迷惑だが，これもチリ最南部の僻地港エデンにある唯一の公的機関に課せられた仕事のひとつである．

2月8日．ジローとぼくは，「サン・ハビエル」号で，ファルコン・フィヨルドの海岸キャンプまで，残った装備の撤収に出発した．ボートには，神父，水先案内の漁師のほかに，シュミットという長身の若者もいっしょだ．神学生で夏休みを利用してエデンへ来ているという．「サン・ハビエル」号は，ファルコンへ入る前に，まずエクスマウス・フィヨルドの六甲隊上陸地点に向う(図2)．神父は，六甲隊のチリでの留守本部長の役を務めている．かれらをフィヨルドの奥に運んだのちも，10日おき位に上陸地点を見にいっている．かれらの計画は，氷陸を南東方向に斜めに横断し，アルゼンチン側のウプサラ氷河を下降しようというものだ．途中にあるリソ・パトロン峰の登頂もねらっている．その間約60 km，60日分の食糧を人ぞりでひっぱって進むというしんどい計画だ．途中，まん中あたりでは雪のコル(鞍部)も越えねばならない．なにかことがあった場合は引き返すしかないこともある．引き返して海岸までもどってもエデンからは遠く海をへだてている．トランシーバーでは通信もできまい．その場合のためにこうして時々巡回に行くのだ．今までパタゴニア氷陸の探検がアルゼンチン側からばかり数多くなされ，チリ側からはほとんどなされなかったのは，このアプローチと退路の困難さからだ．

図3——海にせり出した長大なピオ11世氷河の末端． 氷河の幅は5 km近くある．

ボートはグラップレル水道を離れ，エイレ・フィヨルドを北へつめる．北風のため逆波を受け急にスピードが落ちる．ドスンドスンと波を受けるたびにボートは激しく振動する．

午後4時頃，前方にピオ11世氷河の末端が見えてきた(図3)．日本でつねに思いをめぐらし憧れていたものに今やっとお目にかかる．幅6 kmのフィヨルドいっぱいに拡がる姿の壮大さには，驚きをこえて恐れさえ感じさせる．さらに近づいて見ると，氷河端は奇怪なかっこうをした数十mの氷壁が遠々と続いている．東にほぼ直角に入る支谷エクスマウス・フィヨルドの入口のすぐ手前まできている．1944年から45年にかけて，アメリカ空軍が撮った航空写真をぼくたちは持っていた．末端の位置は，写真の位置より約10 kmも前進している．平均すると年に400 m余も前進していることになる．いったいなぜだろう．HPS10氷河を当時の航空写真の位置とくらべてもほとんど変化していないようだ(図4)．とすると，チリ・パタゴニアの氷河全体の傾向ではなく，ピオ11世氷河だけの問題になる．が，チリ側で最大級の氷河だけに部分的な現象と片づけるわけにはいかない．

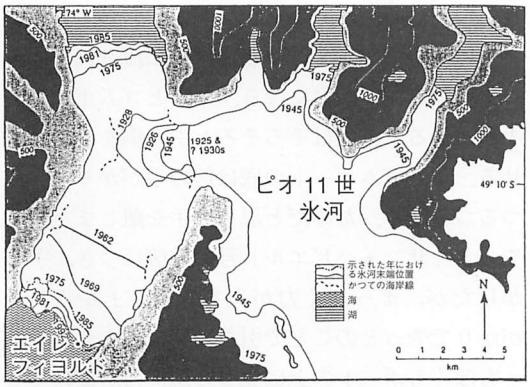

図4――ピオ11世氷河の20世紀の変動. 数字(年代)は，その年の末端の位置を示す．(安仁屋(1998)から引用．原図はWarren and Rivera(1994))

六甲隊の取り付き地点へ

細いエクスマウス・フィヨルドに入り，海は急に静かになる．両岸は切りたった岩壁がせまり，陰惨な感じだ．小さな入江に止まってエデンからの放送をきく．その入江でパト(野鴨)を漁師が猟銃で撃ったが，失敗．エデンの漁師は猟師も兼ねており，半漁半猟というべきだろう．猟といっても海に棲むロボ(あざらし)，ヌートリア，ラッコ，テン等の海生哺乳動物が中心だ．ボートで出かける時は猟銃を携行することを忘れない．

六甲隊の上陸地点は，さらに奥の，小さな入江だった．フィヨルドの入口から25 km，もう最奥部に近い．キャンプ跡に，神父はビンにメモを入れて置いている．来るたびに記録を書きこんでいる．撤退してきた六甲隊との連絡用だ．巡回も今回で終りだという．

少し小高い丘に上がると，氷陸の縁がすぐそこに見える．びっしり原始林の生えた急な斜面の上部に，氷陸からあふれ出るように万年雪がかぶさっている．海抜1000 m付近だ．から身なら1日であがれそうだが，数百kgの荷物を運びあげるにはかなりの労力を必要とするだろう．あとでかれらにきくと，やぶこぎ，川の渡渉，湿地，岩場のルートを20日かかって荷上げしたという．1963年のガルシア氏一行もこの上陸点から氷陸にあがっている．チリ側から氷陸へ氷河を通らずに取りつく唯一のアプローチのようだ．ところで，六甲隊は不要になった装備を神父に持ち帰ってもらうべくデポしておいた．ところが，神父が来てみるとなくなっていたという．通りかかった漁師かインディオが持ち去ったのではないかと神父はいう．こんなところまで手こぎのボートやカヌーでやってくるのか．エデンから100 km以上も離れている．

「サン・ハビエル」号は上陸地点をあとにする．もう午後8時だ．朝メシからまだ何も食べていない．ジローと2人でたまらなくなってパンをかじる．驚いたことに神父らはいっこうに食事をしようと言わない．腹はへらないのかときくと，神父は「私は昨日は一食，今日はまだ水だけだ」と言う．太りすぎをなおすためだという．冗談じゃない．こっちまでつき合わされたらたまったものじゃない．が，チリ人というのは，のんびりしている．エデンに来てからも，ボートに乗って7時間も8時間も何も食わずじっとさせられることは幾度かあった．ちょっと出かけようと言われて軽い気持でついていくと，夜中まで帰れないこともある．今日は日帰りの予定だ．「サン・ハビエル」号の速さから計算しても何とか1日で帰ってこられるはずだ．しかし，もう午後9時だというのに，やっとエイレ・フィヨルドに戻ったばかりだ．これからファルコンの海岸キャンプに

ピオ11世氷河の大前進

パタゴニア南氷床でも最大規模のこの氷河は，1945年以降急激に前進し，私たちが見た1969年以降も図4に示すように，少なくとも1992年頃までさらに前進していることが，その後のチリや日本の研究者らによって明らかになった．ただし，パタゴニアの氷河の大部分は，特に1970年代以降，後退傾向にあり，南米大陸南部での温暖化傾向と関連しているのではないかと推測されている．この氷河の大前進は，気候変動ではなく，サージとよばれる氷河独自の動力学的メカニズムによる急激な前進ではないかと考えられている．(詳しくは，岩田修二: ピオ11世氷河の近年の前進について(日本雪氷学会氷河情報センターパタゴニア氷河研究委員会編: 1967-82におけるチリパタゴニアの氷河と気象(1983)(英文)所収); 安仁屋政武: パタゴニア―氷河・氷河地形・旅・町・人，古今書院(1998)などを参照)．

寄って明朝までにエデンに戻るつもりなのか．ところが，神父は小さな島かげの静かな入江にボートをとめ，今晩はここで泊るという．しまった．またしても「アスタ・マニャーナ(また明日)」だ．ぼくたちは1日分の食糧しか持参せず，寝袋も持参していなかった．

フィヨルドでのゴムボート転覆

翌朝早く，再び出発．風も波もなく快調だ．午前8時．ファルコン・フィヨルドの海岸キャンプに着く．ぼくたちはキャンプから少し離れた海辺の岩場にゴムボートをかくしていた．

キャンプ沖に「サン・ハビエル」号を停泊させ，ゴムボートで装備を運ぶことにする．ゴムボートを「サン・ハビエル」号で引っぱってキャンプ沖まで行こうと神父がいう．ちょっと心配だったが，ブンヤとぼくが乗って一度試みたことがあった．まあ大丈夫だろうということで引っぱってもらうことにする．「いいぞ」と合図して動き出した．ふと見ると，ジローは何げなくゴムボートの片舷に腰かけている．前に引っぱってもらった時は2人共底に背を低くして座りこみ，引き綱もブンヤが長さを調節しながら持っていたことを思い出した．今度は綱も数mに固定してしまった．ああ危ないなと感じたが，どうしたわけかことばに出ない．とその直後，モーターボートが急にカーブを切ったとたん，ゴムボートは大きく傾いた．アッと思ったらすでに海にはまっていた．ジローも2,3m前で必死になって泳いでいる．裏むけになったゴムボートにつかまろうとしている．うしろに乗っていたぼくはゴムボートから4,5m離れてしまっている．厚着している上に雨具をつけ，長靴まではいている．思うように泳げない．水にはまったら長靴をすぐ脱げなどとボート係のブンヤは言っていたが，厚手の靴下をはいてピッチリしている靴なんか脱げるはずがない．ジローはやっとゴムボートにしがみつく．何かわめくが，ことばになっていない．「サン・ハビエル」号はすでにエンジンを止めて3人ともじっとこちらを見すえている．ぼくは平泳ぎでゴムボートに近づく．重たい．苦しい．ジローの毛の帽子が流れてきた．自分の命が助かるかどうかもわからないのに，帽子をつかんでしまう．同時に流されたオールや空気ポンプが気になる．やっとゴムボートに手がかかる．神父はそろそろと引き綱をたぐり寄せる．が，ゴムボートの底は何の手がかりもなくつるつる滑る．だめだと思って手を離しまた泳ぐ．やっと「サン・ハビエル」号の舷側につき，手をかけたが，まったく力が入らない．上から2人がかりでやっとのことで引き揚げてもらう．ジローもぼくもボートの上に立つと急に力が抜けてしまった．そして，はじめてガタガタと寒くなってきた．神父は安心したためか，急に笑いだした．腹が立つ．さっそく小さなキャビンに石油コンロをたいて服を脱ぐ．やっと生きた心地にかえる．それにしても，まったく水からはいあがる力がなかったところを見ると，冷たい海水にかなり体がしびれていたようだ．氷山の浮くフィヨルドの水温は3度前後だ．もう少し水につかっていたら，と思うとゾッとする．湖や川下りではいつも着けていた救命胴衣もこの時はつけていなかった．

なにしろ日帰りのつもりだったから着替えもない．すべて脱いで思い切りしぼってまた着て，石油コンロにあたる．ベタッと冷たく気持が悪い．キャビンの中は水蒸気でモウモウとなる．

雨が降ってきた．キャビンの窓を開けてみると，浜辺で神父とシュミット青年がキャンプの荷物をゴムボートに積んで運ぼうとしている．濡れた姿で寒いし，何よりも転覆直後でゴムボートに乗る恐怖感がのこっている．しかし，2人にまかせっきりにすることはできない．運ぶべき荷物は40kg前後の箱が10ほどもある．雨具をつけてキャビンを出る．

帰途は，2人共キャビンにこもって石油コンロをたきっぱなしで服をかわかす．神父らは温かい飲み物やパン，肉のかん詰と気を配ってくれる．

ゴムボート乗りは1カ月のエカウク湖のキャンプでかなり慣れ，相当危険な川下りも何回かやっていた．そんなことで，はじめの頃は乗り降りから座り方まで注意深くやっていたのが，次第に気軽にやるようになっていた．それが転覆事故となってでてきた．

いつしか疲れにうとうととしてきた．